

「恵みによって」

ローマ 12:3-5

### 【1】恵みによって

1節「あわれみによって」、3節「恵みによって」とパウロは繰り返して同じことを述べている。私たちの礼拝、信仰生活の前提がこの神のあわれみ、恵みにあることを彼は身に沁みて味わい経験している。このことをすべてのキリスト者に味わってもらいたいためにこの手紙は記されていると言って良いであろう。

キリスト者にとって神のあわれみ、恵みを味わうことはその人の生き方に関わってくる。もしそれらを忘れてしまっているなら、様々な問題が生じる。信仰生活も礼拝も意味が失われ、喜びが失われ、不満や怒りが湧いてくることさえある。

パウロは恵みのゆえに、信仰者一人ひとりが自分のからだを生きたささげ者として献げることを勧めている。これは毎日の生活にも適用されることである。このような生き方が、キリストにあって生きる者にふさわしい生き方だからである。

### 【2】恵みのゆえに謙遜に

3節からは教会を立てあげていくことについて教えられている。キリストを信じる信仰は私個人のことにとどまるものではない。それは礼拝を土台として教会を立てあげていくことと切り離せないものである。

教会を立てあげていくために、パウロは3節で「思い上がってはならない」（傲慢になるな）という警告がなされている。傲慢さは教会の交わりを破壊するものである。思うべき限度を超えて思い上がるとき、私たちは神の聖さ、

栄光を汚してしまう。神が主ではなく、自分自身が主になってしまうからである。それは、個人的なことだけではなく、教会全体が傲慢になってしまうこともある。ローマ教会の中には分派が存在し、互いに批判しあっていた（14, 15章）。

「思い上がってはいけない、慎み深く考えよ」これが今日の中心命令である。一人ひとりには神から与えられた恵みの賜物がある。それはそれぞれに十分なのである。私たちの働きは達成すべき目的、自己実現ではない。神からの賜物である。慎み深く考えないとそれを見失い、自分の中に分裂が起こり、不満や焦りや高慢になってしまう。賜物を用いる原則は謙遜であるということである。

### 【3】キリストのからだとして

教会を建てあげることの前提が3節にある謙遜の勧めである。そして、4節からその働きについて記されていく。このことはIコリント12章、エペソ4章にも同様に記されている。

もし、私たちが限度をわきまえて高ぶらなければ、キリストのからだを分裂させるような思い上がりには陥ることはない。各器官は独自の機能を持ち、他の器官が肩代わりすることはできない。私たちはからだ全体という観点から、その一つの器官として置かれた場所と働きを考える必要がある。そして、その働きができることを神に感謝すべきである。

5節「キリストにあって一つ」ということは何でも同じでなければならぬということではない。様々な賜物を与えられた者が交わりを持ち、互いに影響しあって、その賜物を用い合うこと「霊的な礼拝」（12:1）である。